

許六『追善註千句』翻刻と略注(二)

牧 藍子
藤井美保子

本稿は、「許六『追善註千句』翻刻と略注(一)」（『成蹊人文研究』第二七号、平成三二年三月刊）の前稿を継ぐものである。

- 一、※に逸丸筆写本に関する注記を示した。
- △に林筆写専宗寺旧蔵影写本との校異を示した。
- ◎に句の季などを示した。
- に略注を示した。

【凡例】

- 一、句頭に番号を付した。
- 一、本文の行移りは原本とは一致しない。
- 一、振り仮名・送り仮名・濁点は全て底本のままとし、句読点などは私に付した。

【翻刻・略注】

註千句

第二

1 鶯や飯米は持ッ何千里

千里鶯啼てといふは、詩なる故にかきれり。はいかいは、何千里といひはなしたるを第一とす。此句、鶯の妙々にして、これに通せぬ人は当流のはいかいかつてならず。さしてふかき事なし。年明てゆるりとしたるといふ事なり。

- 明らかに誤字と認められる文字には（ママ）と傍注した。
- 一、漢字は原則として現行の字体に改めたが、一部そのままとした。
- 一、片仮名は「ハ」「ミ」など、変体仮名と認められるものは平仮名に改めたが、小文字で記されたものなど一部そのままとした。
- 一、仮名・漢字のおどり字「ヽ」、「ヾ」、「〳」はそのままとし、漢字のおどり字は「々」で示した。

△「詩也故」「俳諧は」「いひはなし得る」「いふ事也」

◎「鶯」(春)

○千里鶯啼て 杜牧「江南春」の起句「千里鶯啼緑映紅(千里鶯啼ヒテ緑紅ニ映ズ)」(『三体詩』)という句を指す。○『追善註千句』各巻発句は、『正風彦根体』(正徳二・一七二二年刊)をはじめとする後の撰集に採録されている。

2 枝をならさぬ緑くれなる

緑紅に映すと云。本文一句に植物なくして紅は花、緑は柳なり。右発句、泰平言外にあり。其所を聞へし。

△「映すといふ」「柳也」(有^{ナキ})

◎「緑くれなる」(春)

○緑紅に映す 前句でふまえた詩句中の語。○枝をならさぬ 泰平の静かな世。

3 町方のしめり悦ふ春雨て

江戸の句。

◎「春雨」(春)

○春雨 しとしとと降り続く春の雨。○江戸の句 江戸は火事が多い。

4 鱒手はやく作る穴蔵

江戸柵のせまき家は、一切穴蔵にて仕廻ふ。亭主も客も、

春雨のしめやかなる物語、いふと思ふ内に出来合手はやくすへたり。

△「おもふ」

○江戸柵 他の地方の人、特に上方の商人が江戸においた店。狭いので、穴蔵で諸事を済ましたか。○穴蔵 物を貯蔵するほか、火事の際に家財を守るのに使った。

5 兜見に女房の親の夫婦つれ

カブト
はじめて出生の孫をもてなし、幟、人形、よ所よりは美々敷を老の悦ひとせり。

※「出」は「て」の下に「○」を書き、右に傍記。

◎「兜」(夏)

○兜 日本橋室町十軒店には、五月節供の直前にたてられる兜人形の市が立った。江戸時代初期には、端午の節句に江戸では家の前に柵を結び、兜・薙刀・毛槍・幟・吹流し等を飾った。兜には義経や弁慶、張良などの人形の作り物をしたものもあった。江戸時代中期になると、家の中の表から見えるところに大きな武者人形を飾るのが流行したが、次第に小型化していった。『日本歳時記』(貞享五・一六八八年刊)に「近年は風俗美巧をこのみて、木をもつて人馬の形にきざみ、又はりこにして采色をほどこし、或甲冑をきせ、劍戟をもたせ、戦闘の勢をなさしめて、戸外に立て侍る。是をかぶと、いふ。」と、武者人形(兜人形)を「かぶと」という例がみえる。

6 状書イてやる碁打友達

しうとの碁打友達よひあつめたり。

△「よび」

7 好コひ物を一種もらふて宵の月

是はわか竹馬の友なり。しうとの馳走と見へからす。

△「友也」「見るへからす」

◎「宵の月」(秋)

○好コひ物 酒などの馳走。○宵の月 陰曆八月の二日目から七、八日目頃までの月をいう。夕月。この夜は宵の間だけ月があり、ほの明るい。

8 くクゞりを明テてもどるどぶ酒

宵の字に心を付へし。

△「もとる」

◎「どぶ酒」(秋)

○くクゞり 門の脇などに作った低く小さな戸口。夕方になれば門は閉めてしまう。○どぶ酒 濁り酒、どぶろく。民間で広く自醸されていた。

ウ

9 肌寒クぬるき入湯に旅馴レて

釜をかたふけ、湯のすくなき旅籠屋の入湯は常の事なり。

△「事也」

◎「肌寒」(秋)

○肌寒 夜間はずもとより、昼間日が差していないときや、夕暮れ時にも寒さを感じるようになること。

10 腰骨いたむ天龍の疵

西行上人、天龍の船頭にた、かれ給ふ古事。

○古事 西行が「天中のわたり」(天龍川の渡船場)で武士の乗る船に便船した際、乗客が多いので降りると鞭で頭を打たれて頭から血を流しながらも、少しも恨む様子を見せなかつた話が『西行物語』に見える。「腰骨いたむ」は旅の疲れか。芭蕉も「跪はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ」(『笈の小文』)と、和歌浦で同じ古事を想起している。

11 早追ハの馬から落レて高カ軒

此句、前に大キにしたしけれど、うみ所のかはる少シの所になづみて輪廻を忘たり。

△「なづみて」

○早追ハの馬 昼夜兼行の急使の乗った馬。○高カ軒 昏倒して高カ軒を

かいているか。○輪廻 連句においては、前出の句と似たような語句・表現・意味・趣向による句が付けられ、句の流れが戻ることを輪廻といつて嫌う。ここでは、前句に付きすぎている難に対する弁解はできて、打越との輪廻は免れないという反省。

12 木曾は負たと触る谷ヤツく

鎌倉の句、宇治勢田はやふれ、粟津か原にて木曾を打とり
たると注進の飛脚。

△「粟津ケ原」頭注「シンカ」(「注進」の「進」の書き方があいまいであることに関する注か)。

○宇治勢田 源範頼・義経対木曾義仲の戦い。義仲軍は敗れて数騎となり、義仲は粟津の松原で討ち取られた。

13 末広に烏幅(マ)子(マ)きつれて咄キし好キ

老極の東大名、又は若輩の武士、頼朝の御館え御悦を申
上らる、なるへし。

△「咄シ」御館へ「を」上らる、

○末広 扇のこと。末広がりで、おめでたい意もきかせるか。○きつれて 着連る。多くの人が揃って着物を着て連れ立つ。

14 除目がすめばさわく挑灯

是は縣召の除目はて、下馬のさはき。

◎「除目」(冬)「除目」の注参照。

○除目 京官、外官の任命儀式。春秋二回あり、春の除目を外官(国司などの地方官)を任命する県召除目あがなし、秋の除目を、大臣以外の京官(中央諸官司の官僚)を任命するのを主とした司召除目つかあしという。前句の「東大名」から春の除目(正月一日から三日間行われた)の場面が想定されるが、次の句の自注から、許六は県召除目を冬とみている。○下馬 下馬先で、寺社の門前や城門の前など、下馬すべき場所。

15 乗物のやね白く、と雪降て

縣召は冬なり。乗物のやねといふ句作り、目たちたる事は
なけれとよし。

△「冬也」「屋根」

◎「雪」(冬)

○乗物 特別な引戸駕籠で、原則として公家、門跡、国持大名、医者など、特別な身分の者が乗ることを許された。

16 師走嫁入の寒き聾殿

もし嫁入に季をむすは、都鄙極月にきはまるへし。

△「さむき」

◎「師走」「寒き」(冬)「嫁入」(恋)

○師走嫁入 嫁入を詠むならば冬季がよい。許六には「嫁入の門も

過けり鉢たゝき〔韻塞〕他〕の句がある。

17 烟草盆前にかゝえてあばれ呑、

聳の臆面。

△「かゝへて」

○あばれ呑 氣をくれした婿が、烟草盆を抱えて、ひたすら酒を飲む様子。

18 晩の躍は瓜の喰あき

名主宿老、おとりによはる、若もの也。

△「晩の踊」

◎「躍」(秋)「瓜」は夏の季語であるが、食い飽きているという句意から秋とみたい。

○晩の躍 盆踊り。室町時代から江戸時代にかけて急速に全国的に普及した。○名主宿老 村長、町名主、年寄役などの年長者。

19 行水に邪魔の入たる暮の月

とく支度して躍に行んと催す所へ、しうとの永咄、行水迄

遅なはりたり。

△「踊」「遅なはわりたり」

◎「月」(秋)

20 灸のふたを風に吹する

行水かり、暮といふ所を思ひ入て付たり。

※「行水あかり」の誤記。

△「行水あかり」「おもひ」

○灸のふた 灸のあとにできたかさぶた。あるいは灸のあとにはる薬などを塗った紙。風呂上りの情景。

21 すねあてをはつして花にかしこまり

鎧武者、すねあてしてはかしこまられす。亀井・片岡・

伊達^{タテ}・根の井、党の出頭人、御前近く立廻る時はすねあ

て無用成へし。

△「近」

◎「花」(春)

○すねあて 脛に当てる防具。○亀井・片岡・伊達・根の井 亀井・片岡は義経四天王の亀井六郎と片岡八郎、伊達は楯氏で根井とともに木曾義仲の率いる木曾を中心とする在郷武士の姓氏か。○出頭人 一族の主人の側にあつて政務に参与するもの。

22 俄内裏をならず早蕨

俄たいりは須戸の上野の俵。ならずの詞、当流の肝要なり。

△「肝要也」

◎「早蕨」(春)

○須戸の上野 神戸市須磨区。安徳天皇内裏跡があるとされる。『撰津名所図会』(寛政八〜一〇・一七九六〜九八年刊)には「一谷の上にあり。こゝも須戸の上野といふ。」とみえる。○ならず 平らにす。俄内裏の床のでこぼこを早蕨が均す。

二

23 三月は四日五日も汐干にて

なにはの都をはしめ、はまの内裏、数く也。汐干は三月

三日にきはまりたるは、人々の隙日を定む。四日五日は三

日方も猶引なり。

△「はしめて」「きわまりたる」「三日より」「引也」

◎「汐干」(春)

○汐干 潮が引いた浜で貝類や海藻などを採って遊ぶこと。季節の風物詩であった。近世諸歳時記に三月三日。この頃、一年の中で潮の干満差が最も大きくなる。前句の須磨の浦からの連想。

24 海の向ふにすはる遠山

海の向の山はすはりよき盆山を見るかことし。景曲也。

△「向ふの山」「如し」

○盆山 盆景の山。○景曲 許六の『宇陀法師』に師説として「景気の句、世間容易にする、以の外の事也。大事の物也。連哥に景曲と云、いにしへの宗匠ふかくつ、しみ、一代一兩句^二は過ず。景気の

句、初心まねよき故、深いましめり。(中略)惣別、景気の句は皆ふるし。一句の曲なくては成がたき故、つよくいましめ置たる也。」とある。なお、曲とは興趣のこと。この句では、遠山を「すはる」と描写した点に曲が認められる。

25 目の筋の残りて松の暮かゝり

筋の一字、景曲の眼、こまかに気を付て見るへし。翁の第

三に、雪隠のこもの編目に月もれて、此編目にて天地をか

へしたり。

○目の筋 視線。ここでは、美しい浜の景色に見とれるうちに、早くも松林は暮れ方になったことをいう。「筋」の語に工夫がある。○雪隠のこもの編目に月もれて 未詳。○天地をかへしたり 月影が漏れている風雅な景が、「編目」の語を介して、雪隠と取り合わされることで、景曲の句となったことを言うか。

26 駒の旅する秋も来にけり

八月十五夜、信濃の望月の駒むかひ、段々に日をかへて諸

国の駒迎あり。

◎「秋」(秋)

○望月 望月牧。今の長野県北佐久郡。古来、八月の中旬頃、駒牽の儀式の際に朝廷に馬を献上し、その馬を官人が逢坂の関まで迎へに行く駒迎の行事が行われた。

27 新蕎麦を信濃の国の玉まつり

しなの、国の新そばは、都の方のうとん素麵を手向ることく、かならず七月には出来^ル由。初秋も立ぬれば駒の旅もちかよるといふ観念なり。七月玉まつりを付る。前句八月十五日の事也。是は功者の付句といふなり。句はたはよくあふたり。秋も来にけりといふ所、細に気を付へし。

※「麵」の字、偏と旁が逆になつてゐる。
△「玉祭」「新そばは」「素面麦」「観念也」「七月玉祭」「といふ也」
◎「新蕎麦」「玉まつり」(秋)

○新蕎麦 その年の秋にできた蕎麦の粉で打つたそば。『滑稽雑談』(正徳三年序) 八月に掲出し、「蕎麦は七月に種を下して、八九月に実のる、然ども未熟也。此時におゐて関東北越などには、其莖にある物を振落し、或は焙炉にて乾て、磨て麵とす、殊外風味よろし、是を新蕎麦と称し、或は振ひ蕎麦と称す。武州の諸家、殊に之を賞し、其采地の土民に課て、秋月一日もはやきを以て賞翫とす。」としており、七月にできるのは早い。

28 千村山村月にむら雲

木曾義仲四天王の家老、千村・山村・原・斎藤、よき比の乗相、古風嘉例之玉まつりあるへし。今はしらす。

△「木曾」義仲
◎「月」(秋)

○木曾義仲四天王 今井兼平、樋口兼光(今井兼平の兄)、根井行親、植親忠(根井行親の六男)。○千村・山村・原・斎藤 千村氏、山村氏は木曾氏一族。慶長五年、関ヶ原の戦いの後、原氏とともに徳川幕府に召し抱えられた(『千曲之真砂』宝暦三・一七五三年成)。斎藤一族には義仲を幼少期にかくまった斎藤実盛がいる。○乗相 同じ乗り物にのること。ここでは良い仲間の意。○嘉例 めでたい先例。吉例。○月にむら雲 「月に叢雲花に風」の略。好事には差し障りが起こりやすいことを言う。

29 口切の客ぬる、ほと時雨して

四天王の口切、よんづよはれつ。されと山中の会席、そは切の外はこのもしからず。千村の日は天気能て、はや山村の比は初時雨、一入茶しみて面白かるへし。

△「四天王」口切「そば切」「天気よくて」
◎「時雨」(冬)

○口切 陰暦一〇月の初めごろに新茶の壺を初めて開ける、その茶会のこと。時雨の時期にあたる。

30 すた／＼走る宇治の初氷魚

氷魚は田上とはかり思ひ侍れと、内膳式に田上宇治両所より献すとあり。京へは宇治近かるへし。

◎「氷魚」(冬)

○田上 滋賀県大津市南部の地名。歌枕で水魚の名所。『連珠合璧集』に「水魚とあらば（中略）宇治川、田上川」とあり、宇治・田上の網代で水魚をとることは諸歳時記にみえる。○内膳式 延喜式三九・内膳司に「山城国近江国水魚網代各一处。其水魚ハ九月ニ始メテ十二月卅日マデニ之ヲ貢グ。」とある。

31 唐破風の屋ねほんのりと明か、り

築地の夜明。

△「唐」^{カウ}「屋根」

○唐破風 屋根の中央が高く、両端が反り返った形の破風。門や玄関などに見られる。唐とあるが日本でできたもの。○築地 上に屋根をかけた土塀。宮殿・社寺・邸宅に用いる。

32 土佐坊引て食のさんだく

堀川の御所、土佐坊か夜討、動転に朝食を忘れ、喜三太ひ

とりうつて廻れと、判官の近かつへ、大きに逆鱗をおこさ

れたり。

△「廻れり」〔り〕は○印を挿入して傍に補う〕「大キ」

○土佐坊昌俊 源頼朝に仕え、源義経追討に応じ、義経の六条室町亭（六条堀川邸）を強襲したが、失敗して六条河原で斬られた。この出来事は堀川夜討として有名。○さんだく 算段。○喜三太 系譜不明。『義経記』に登場する。土佐坊が六条堀川邸に夜討をかけた

とき、義経は酒盛りで酔い潰れ、弁慶をはじめ主だった家来は全て出払っており、一人下人の喜三太が奮戦し、義経の窮地を救った。○近かつへ 近餓え。こらえ性がなく飲食したがること、また、その人。ここでは、義経が空腹で機嫌を悪くし、喜三太を叱りつける

と俳諧化した。

33 水汲て足手を洗ふ馬だらぬ

手足をあらふて後、本性になりて食のさんたくなる。

△「成て」

○馬だらぬ 馬を洗う大きなたらい。『義経記』では、堀川夜討の前に、義経家臣の江田源三が、鎌倉からやってきた土佐坊の宿所に行くとき、一行が馬から鞍をおろして馬の脚を洗っているという場面がある。

34 痺癬をうつる追分の旅

信濃追分の遊女の形見、よき人には非^ろ。たらぬ手ぬくひ

よりうつるとて、傍輩大キにいやかり、此時馬たらひ重宝

になる。下品の旅人と見る事、肝要也。

△「大キにいやがり」

○痺癬 痺はしびれ、癬はたむしのこと。ここでは意味から考えて、伝染性の皮膚病である皮癬（疥癬）のことか。○信濃追分 現長野県北佐久郡軽井沢町。中山道と北国街道の分岐点にあった宿駅で、

遊女屋や茶屋が多かった。

35 形見うき加賀の飛脚の烟草入

追分、小室、是か、道中、小田井、岩村田は上方の宿也。

依之追分の名あり。

◎「形見」(恋)

○小室 現長野県小諸市。北国街道の宿駅。○か、道中 北国街道。

○小田井 現長野県北佐久郡御代田町。中山道の小宿、追分宿へ一里一〇町、岩村田宿へ一里七町。○岩村田 現長野県佐久市。中山

道の宿駅、城下町として栄える。

36 博奕の銭をつなく行燈

上下飛脚の常。

△「燈」ルビなし。

二ノウ

37 鯁提て魚屋の洗ふ井戸の端

専はくち宿。

◎「鯁」(冬)

38 役者の船のかゝる宮嶋

役者の舟、無塩なり。安芸、宮嶋にも常芝居あり。是は四

国九国へやとひて渡る舟なり。

△「無塩也」「宮嶋に常芝居」

○役者「河豚―役者」(『俳諧小傘』)。○無塩 保存のための塩を用いていないところから、生で新鮮であること。ここでは「役者の船」を詠んだ点に新しみがあるといふことか。○常芝居 宮島には市が立ち、諸国から人々が集まるのを目当てに芝居が行われたことが「好色一代男」などにみえる。しかしこれは旅芝居とされ、元禄頃の番付等が残らないため、常芝居が行われたかどうかは確認できない。

39 十分の四国九国は世の中で

数字のはしり。

○はしり 『葛の松原』に、付合の手法を説明する箇所「走」の例として「敵よせ来るむら松の音／有明のなしうちゑほし着たりけり」を挙げる。この付合は『三冊子』に「前句の事をうけて、其句の勢ひに移りて附たる句也。」「初懐紙評注」に「前句軍の噂にして、また一句更に言立たり。梨打ゑほしにてあしらひ、付様からくしてよし。」と説明されている。なお、「有明の」は芭蕉句。

40 唐物が来てさかる初秋

からおらんだ入つどひ、端物のさかりはうれしけれと、毛
せんのみさかり、かつてきられず。

△「唐物か」

◎「初秋」(秋)

○端物 ここでは反物で、和服用の織物。○かつてきられす しくじる、勘当を受けるといった意味の「毛氈を被る」をきかせ、毛氈は値下がりがしたところで着て歩くことはできないということ。

41 越後屋は鼓太鼓で月をみる

越後屋は三ツ井なり。当時いまめかしく侍れと、天下になり渡りたるを、越後やなれば、今めかしきとあたらしき境、弁じかたかるへし。

△「見る」「三ツ井也」「天下」「越後屋なれば」「弁し」

◎「月」(秋)

○越後屋 延宝元年(一六七三)三井高利が江戸本町一丁目の借店に開いた呉服屋。天和三年(一六八三)江戸駿河町に移転、「薄利多売現金懸値なし」「正札販売」の新商法により大いに発展した。今の三越百貨店の前身。○いまめかし 許六は『俳諧問答』において、其角の「越後屋に衣さく音や更衣」(浮世の北 元禄九・一六九六序)の句について、越後屋という「今めかしき物」を題材にしている点を批判し、末々の弟子がこの「今めかしき」句を「あたらしき」句と誤解することを危惧している。『俳諧問答』は、元禄一〇年から翌一年にかけて、去来と許六の間にかわされた俳論の応酬であるが、本註千句が成った宝永七年(一七一〇)までの間に見方が変化している。

42 余程つかふて高泉の禪

つかふは金なり。当時京大坂のかね持、唐僧をたふらかし て払子をふる事はやり物なり。

※「たふらかし」は「た」の誤記を見せ消ちにして「タ」を右傍に補う。

△「金也」「たふらかし」「物也」

○高泉 高泉性激(二六三三〜九五)。黄檗宗の帰化僧で、黄檗山万福寺中興の祖。○払子 獣毛や麻などを束ねたものに柄をつけた法具。

43 物数奇に糶炊菜にしやれきつて

鯛鮓にかへたるぬかみそ、まされ物あり。勝手手の為のわるじやれ、世間に多し。由断すへからず。

※「まされて」の「て」抹消。

△「糶炊菜の」「ぬかみそ」ルビなし。「まされて物」

○鮓 鮓。○糶炊菜 『書言字考節用集』卷六「服食門」に「糶炊

又云、糠味噌。糶炊菜はぬかみそを使った献立。○わるじやれ ここでは本来なら鯛や鮓を使うべき料理を、台所事情から別のものので下手に代用して失敗していることをいう。

44 恋にはそまる木曾の麻衣

伊賀ノ守業忠か勸勤の娘中宮の小弁にうき名を立られ、伊賀より木曾へ夜ぬけ時の哥に

風雅集^へ思ひたつ木曾のあさきぬあさくのみそめてやむへき

袖の色かは 兼好一代は圓太曆に委出。

△「風雅集」の注記なし。

◎「恋」(恋)

○小弁 兼好法師は若い頃、京の都で天王に仕える武士だった。同じく宮中務めの小弁の局という娘に恋をしたが、娘の親(伊賀守)に反対され、この恋は実らなかつた。それで世の中がいやになり、青山町に隠れ住むこととなった。なお、『園太曆』偽文・第二〇条に「中比、伊賀権守橋成忠、之ヲ招ク(成忠、伊賀国荒木郷二住ム)。故ニ伊賀国ニ赴キ、成忠ノ亭ニ居ル。居ルコト三年、成忠ノ娘ニ通ズ(中宮小弁、病患テ里居。十七歳。)」とあるが、「思ひたつ」の歌はみえない。また近世の兼好伝『種生伝』(元禄七年跋、正徳二年刊)では、小弁との密通が露見し、東下りをする展開となっている。○思ひたつ 『風雅和歌集』雑歌下・一八五五番に兼好法師の歌として「世をのかれて、木曾路といふ所を過るとて」という詞書とともに収められる。室町時代に成った『吉野拾遺』には、後宇多法王の崩御を契機として出家し、その後木曾の御坂あたりのたたずまいに心を留めて庵を結んだ際に詠んだ歌として出てくる。『種生伝』、『兼好諸国物語』(宝永三年刊)、『奈良比野岡』(享保二二・二七二七年刊)などの近世の兼好伝においても同様。『兼好法師集』には三句目「木曾のあさぬの」とみえる。○圓太曆 『園太曆』の誤記。『園太曆』は洞院公賢^{うらいたけのさかた}の日記。応長元年(二二二二)から正平一五年(二三三〇)

までの記録であるが、完本としては伝存しない。江戸時代には、園太曆の記事から兼好法師の記事を抜粋したと称する偽の記録が流布していた。

45 書くどく奉書の文のかさ高に

奉書のかさ高なる恋の文。是を今やうのこなしといふなり。当流の眼。

△「今やう」の「今」脱落。

◎「文」(恋)

○奉書 奉書紙。厚手の高級紙。○恋の文 兼好法師が高師直の恋文を代筆したことは『太平記』にもみえ有名。○こなし くだいて平明にすること。前句が兼好法師を佛にしていることを当該句で示唆する。「こなし」については、第一百韻の第36句目の注参照。

46 紋をやつする傾城の判

丸之内にかく重ねひらき扇 紋所の図柄。○五大井はたかおしへ侍るぞ。

△「丸ノ内」

◎「傾城」(恋)

○丸之内にかく重ねひらき扇 紋所の図柄。○五大井 未詳。

47 鬼月も煤餅つきに年暮て

師走正月の傾城とちめんほうをふるの中に、借錢の手形の仕かへ、大方印判も目をまはすへし。

◎「年暮」(冬)

○鬼月 大晦日。『古典俳文学大系7 蕉門俳諧集二』所収「正風彦根体」の許六句「鬼月のみな吐息なり花ぐもり」に、鬼月を大晦日とする宮本三郎氏の注が付される。○煤餅 煤掃きの日につく餅。○とちめんほうをふる 非常にあわてること。

48 魚鳥たゝく明^(ママ)るの元日

門に松立れば借錢乞か来ぬとて、夜の明ぬにかなつきと唐鍬よととどひ廻る。やうく日さしも傾く比、入湯さかやきに男ふりを作り、年越の食はやくする物にて、大鍋の蛤鰯の匂ひもやうくくれて、めつらしき棚に火とほし、燭台行燈、昼のことし。年男の御紋つきの上下、しほたれたる料理人のそばに肩をいからし、鳥の胴からのた、きやう、酢牛房のゆで加減せんしやうもやうく更で、芋蕪のゆであげたるを鼠にひかすなと台所はしつまりぬ。
※「明る」は「明日」の誤記。「かなつきと」は「かなつきよ」の誤記か。

△「明日の元日」「門に松立れば」「かなつきよ」「するものとして」「如し」「御紋」「た、き様」

◎「元日」(春)

○かなつき 金突。平たい、先の尖った鉄に長い柄をつけた道具。ここでは門松を立てるための準備。○唐鍬 頭部が鉄で、木の柄をはめた鍬。木の根を掘りおこす時などに用いる。

49 つれくゝに花の盛をかぞへたて

此句はゆたかなる亭主と見るへし。やり取事済、歳暮の礼も静り、寝酒のさかなに来年の花盛を考へ、金持のうらやましきは此時なるへし。

※「考」は誤字で記される。

△「かそへたて」「花盛り」「考」ルビなし。

◎「花」(春)

○つれくゝに することがなく手持無沙汰なさま。ここでは借金取りや年越しの準備などに煩わされることなく、ゆつたりと年を越す様子をいう。

50 春は京へとのけて置金

三月迄利なしにかりたし。

△「おく金」「三月まで」「借り」

◎「春」(春)

○のけて置金 ここでは三月に京都へ花見に行くのに使うための金。今必要で借りていないので、三月までは無利子で借りて

おきたいという気持ちになる。

三

51 猫の恋いたづら後家の物おもひ

田舎のいたづら後家、何用にやら京へくと上る。黄檗信仰共見えず。西東の門跡参にもあらず。口喰ての百まうけ、野郎の仕合。

△「田舎ノいたづら後家」「上る」「見へす」「参り」「野良」

◎「猫の恋」(春)「いたづら後家」「物おもひ」(恋)

○いたづら後家 好色で浮気な後家。発情した猫の鳴き声を聞くにつけ、後家という自由にならない身の上がいっそう物思いの種になる。○黄檗信仰 宇治には黄檗宗大本山万福寺がある。○西東の門跡参 東西本願寺へ参詣すること。○口喰うての百まうけ 食べるだけで精いっぱい意を表す「口食うて一杯」〔世間胸算用〕等に用例がある)をもじって「百まうけ」(大儲け)としたか。○野郎の仕合 男にとっては思いがけない幸運。ここでは男の方から仕掛けなくても、後家が誘いかけてくることをいう。

52 小指をはねて細う書ッ筆

能書には手くせはなし。悪筆にてはしり書をしつけたるは見苦し。きのとくの山をかさね、よきたよをもとめては渡りの舟ととりむかへ、まゐらせ候といふ事斗を覚て、上

書のうき身もいやなり。

△「しつけたる」の「つ」の右傍に「ツ」を補う。「渡」の「いや也」

○手くせ ここでは小指の先を立てて文字を書く癖のこと。○きのどのやま 気の毒に思う心が積もったのを山にたとえた表現。非常に心を痛めること。また、大変きまりが悪いこと。○まゐらせ候 近世慣用の合字で表記される。○上書のうき身 上書は手紙の表書き。

53 打つ、く節句まつりの近奇て

ひたすら傾城のうへ、御影供の引つ、き、稲荷の御旅、節句のほとりもさめぬに、伊勢の御師の状配ることくすれとも、世がかしこく成て返事もせず。どこの田舎へくたられたるときんみならず。

△「傾城ノ」「返事もせず」「吟味」

○傾城のうへ 遊女の事情、身の上。○御影供 真言宗で、弘法大師の忌日である三月二日に行う法会。○稲荷の御旅 稲荷祭(伏見稲荷大社の祭礼。四月上卯の日を式日とする。)で御旅所から本社へ還幸する祭礼。○伊勢の御師 伊勢神宮の下級の神官。各地の伊勢講に参詣を勧め、祈祷・宿泊などの世話をした。状を配るのもその勧誘の一環。

54 餅米をつく一人中間

武士は高下のわかちなければ、節句祭のくばり重箱、酢に

も味噌にも中間の六介独のほねおりなるへし。

○酢にも味噌にも 何事につけても。

55 台所へ馬かはなれて立さはぎ

六や／＼とよべともからうすの音に聞かれず。中戸をたて、にけてはいれば、菅笠を喰やふられ、くどのはなぶきに黒けふりを立たり。

△「馬が」「立さわき」「六介／＼」「聞入らず」「菅」「けふり」

○からうす 唐臼・碓。地面に臼を埋め、梃子を使って足で杵の柄を踏んでつく。○くど かまど。○はなぶき 「鼻吹」でくしゃみのこと。

56 汁鍋われて蕪なかる、

此日の汁の実はかふら外に大根もならず。

△「ながる、」「此日ノ」

◎「蕪」(冬)

○蕪 なぜ蕪に限定するのか未詳。『本朝食鑑』(元禄一〇年刊)において、大根と蕪菁はいずれも平素日用の菜で、諸国で四季を通じて食される野菜とされており、両者はよく似ている。

57 虚落に足軽町のうら合せ

鍋ひとつは大きな仕合なるへし。

△「大なる」

○虚落 鉄砲などを無駄打ちすること。○うら合わせ 裏と裏が向き合っていること。ここでは足軽町の裏隣。○仕合 大事に至らず、鍋ひとつの被害で済んだことをいう。

58 苜に桃ちる空の長閑也

足軽町のうら畠、苜の跡は茄子と見えたり。

△「空長閑也」「裏畠」「見へたり」

◎「苜」「長閑」(春)

○苜 ちさ。ちしゃ。キク科の野菜。ここでは古く中国から渡来したカギシヤで、香氣と苦みが特徴。「春もはや山吹しろく苜苦し 素堂」(『続虚栗』貞享四年刊)。

59 昼食にわけ葱の菜の日は永

ひなの節句は過れとあさつきわけきの佛は忘れかねたる。殊に長き日に雨さへそほふり、伊勢みやけの若和布は棚になだれて菜にもならず。

※「かねたる」の「る」の左傍に「ヒ」とある。

△「葱」「あさつき」にルビなし。「かねたり」「長キ」「ほそふり」「棚になれて」。

◎「わけ葱」「日は永」(春)

○わけ葱 葉は葱に似るがあまり大きくなく、いくらか柔らかい。

香気は葱に劣るが、晩春葱の欠乏したところに代用される。○あさつき『増山の井』（寛文三・一六六三年奥）に「一説、二月といへり。大やう三月節句に用るにや」とある。○伊勢参り 江戸時代には農閑期である正月から春先にかけて集中した。ここでのワカメはその際の伊勢土産。

60 暖簾なみたつ奥の春風

やはらか成微風。
◎「春風」〔春〕

61 長持の蓋のそつたる雛屋形

楊家の内には深窓の娘を住し、嫁入のぬり長持のふたには箱入の雛をかざる。おつほの醴酒、小皿の干物、三方の草餅は、冠より高く見上^ケ、烟草盆のきせるは口よりはいかし。婢子の道明寺、屏風の内の馬乗、立像の乗物昇、座像の裸子、二階のゆさつきに錫の花立を打かやし、饅頭の水あかり、落雁のゐるとけ、三日の御馳走、娘はあきて大かたは乳母の慰なるへし。

△「楊家の暖簾の内には深窓」「おつほ」「醴酒、小盃」「口より□」（虫損）いかし」「大方」

◎「雛屋形」〔春〕

○雛屋形 雛の家、雛の宿などと同じく、雛人形を飾っている家を

指すとも考えられるが、「山吹に娘かくれけり雛屋形 李東」〔孤松〕等の例から考えると、雛人形の家を指すか。○楊家 「楊家有女初長成 養在深閨人未識（楊家ニ女有リ初テ長成 養レテ深閨ニ在レバ人未ダ識ラズ）」〔白氏長慶集〕「長恨歌」。○おつほの醴酒 小壺に入れた甘酒。○婢子の道明寺 下女が作った道明寺桜餅。○打かやし 二階の振動で雛道具の花立がひっくりかえる。○饅頭の水あかり 「水揚り」で洪水。ここでは花立の水がこぼれて饅頭にかかったさま。○落雁のゐるとけ 「ゐるとけ」は春になり凍った地面などがゆるむこと。ここでは落雁が花立の水に溶けて崩れるさまを、季節にふさわしく表現した。

62 菓子^シをちよつとつまむ大^イ手

菓子^シのはね字、其人を見るへし。

○大^イ いかい。大きい。○菓子^シ 菓子^シの上方訛。はね字は撥音のこと。

63 鶉啼て庚申堂の客の月

七色のお備をつまみ、土器の三寸をいた、きて、客人はわ

かれ^カに帰^カりぬ。

△「お備へ」「帰り」ルビなし。

◎「月」〔秋〕

○庚申堂 庚申待を行う堂。庚申待は庚申の日の夜に集まり、一晚中

眠らずに夜を明かす行事で、最後には酒食が出て夜明けまで欲談する。○七色のお備 庚申に供えた干菓子などの七種類の菓子。○三寸「みき」と読む。御神酒。

64 油を泳ぐ虻むしの夜寒ヤ

其夜の灯明。

◎「夜寒」(秋)

○虻 バッタ目ケラ科の昆虫。コオロギに近い種類で、体長約三センチメートル。晩春から声が聞かれ、夏・秋を通じて活動はやまな。冬は土中でじっとしている。近代、夏の夜に灯火に飛来することから「虻蝮」で夏、秋には地中にもぐってジーンと鳴くことから「虻蝮鳴く」で秋とされるが、近世の諸歳時記にはみえない。

三ウ

65 竹箸に泊瀬海道の芋旅籠

伊勢方はせへ出る海道いく筋もあり。なまり越、かふと

越、田丸、十三越、道筋はかはれど、旅籠の芋は替らす。

△「三ウ」が「三」。「なばり越」「田丸越」「かはらす」

◎「芋」(秋)

○泊瀬海道 三重県津から奈良県初瀬に通じる街道。○名張 三重県北西部の地名で、宿駅として栄えた。○かぶと 加太峠は三重県中北部、鈴鹿山脈の一部で、奈良と関宿(鈴鹿郡関町)を結ぶ加太

越奈良道の宿駅に加太宿がある。○田丸 三重県中東部の地名。伊勢本街道の要地。○十三 十三峠は大阪府八尾市と奈良県生駒郡平群町の間にある峠。

66 女子ヲナコに問へば皆新酒也

湯桶酒のうは米、山中の女子とても由断はならず。

△「女子」

◎「新酒」(秋)

○新酒 その年の新米で新しく作った酒。ももとは神に初穂として供えたものであった。近世に入ってから、商業用として新酒が売り出されるのは新春を過ぎてからが多かったようである。○湯桶酒 湯桶(食後に飲む湯や茶などを入れる漆器で、注ぎ口と柄がついている。)に入れた燗酒。○うは米 ここではうわまえのこと。漆器に入れてあるので、酒が少し減つていてもわからない。

67 綿の実を油カユに代る宿の市

上市、下市、丹波市など、えん豆のより買、綿さねのかへもの、吉野方出る出産マユの売物、京大坂の商人市日をあて、下る成へし。

※「出産」は「土産」の誤記。

△「綿の実」「土産」「商人は」「也へし」

◎「綿の実」(秋)

○上市、下市 上市、下市はともに奈良県中部吉野郡の地名で、吉野川沿いにある。丹波市は奈良県中北部天理市の地名。いずれも綿作が行われていた。○綿さねのかへもの 綿の種子を別の品物と交換すること。綿の種からは綿の実油を製する。大坂では絞油業が盛んで、綿実絞油屋が綿実の買い請けを行った。

68 食時くらき牛馬の蠅

市の立ッ宿には牛馬の蠅を残し、絹に織込、紙にすき込む。此所にも一生をくらせり。地獄もすみか成へし。

△「立宿」「込ム」「成るへし」

○蠅 諸歳時記に夏の季題とされるが、自注に「紙にすき込む」とあることを考えれば（紙漉は冬に行われる）、特別夏の情景を想定しているわけではないとみることできる。○地獄もすみか ことわざ（『毛吹草』等）。住めば都。

69 大釜の火を行水の便りにて

民の耕作は一くらかりして家に帰る。行水、食時はいつでも初夜を過^ろ。されと行燈をとほさず、大釜の火影に家子も主も膝をならへ、給仕は内のおかた成へし。

◎「行水」（夏）

○初夜 一昼夜を六つにわけたときの一つ。およそ午後八時前後。
○行水 たらいに湯や水を入れて、簡単に体を洗い流すこと。〇〇〇

では食事の準備の大釜の火を頼りに暗いなか行水している。

70 門田の苗の半へさす月

苗の半をさし両方の袖をつけるなど、いつそや百姓の咄を

聞置、此時の用^二はたてたり。

△「つけるなど」の「な」は右傍に挿入。

◎田植の情景から夏。

○門田 家の前にある田。○両方の袖をつけるな 苗を植える際、袖が水面につかないところまでさすのがコツであるということか。

「さす」は苗を「挿す」と月の光が「射す」の掛詞。○許六は彦根藩領であった愛知郡青山村で知行三百石の一部を得ており、農民との付き合いもあつた（『森河五助様入分』）として「三拾五石七斗三升式合三勺」（『青山区有文書調査報告書』愛東町教育委員会・歴史研究会『愛史会』、二〇〇五年）。

71 暮水鶏の輪索に引ッか、り

さもあるへし。

◎「暮」「水鶏」（夏）

○水鶏 夏に水郷や低地帯の水辺で昼夜カタカタと鳴く声が、戸をたたくようだと詠まれる。稲の秧時（苗時）の鳥なので「秧鳥」と書き、中国で水鶏と書けばカエルのこと。

72 一むらさめて濁る溝川

さしたる馳走はなけれど、此所には此句よし。

△「一むらさめに」

◎「村雨」(夏) 夏季の句が続いている。

○さしたる馳走はなけれど、ここでは、これといった気の利いた趣向ないことをいう。

73 負づるに衣のまじる跡や先

さすがに巡礼哥もうたはるまじければ首のた、き鉦、米麦

のもらひ、同じ事なるへし。

○負づる 負籠おひざり。僧、山伏などが仏具、衣服、食器などを入れて背負う旅行用の箱。笈。○衣 僧衣。○た、き鉦 念仏に合わせてたたきならす鉦。

74 うき熊野路の米の不自由さ

米なくとも麦あれば減のはやき愁斗なるへし。虱は何にか

へて慰まむ。

○減のはやき 腹持ちが悪いこと。

75 切り剝ミ庄司仲間の大法事

庄司は八庄司也。先祖の年着トビイに珍しき食を大釜にたきたて、朝夕家来の腹をこやす。是よりいき如来の号をかう

ふる。

※「年着」は「年忌」の誤記。

△「切り剝ミ」 「年忌」

○八庄司 熊野八庄司。熊野の八つの庄を管理する役人で、多くは土豪化した。

76 けふも天気でよき彼岸也

前句に付ぬ所をつけぬは上手の作なり。

△「天気で」 「作也」

◎「彼岸」(春)

77 日当りはそろく花の英立て

花のふさたつ、一句のあたらしみ。

△「日当は」 「新しみ」

◎「花」(春)

○英 植物のがく(萼)。またふさのようになって咲く花。

78 長閑に暮る、能因かかね

古曾部の寺にて

山寺の春の夕暮来てみれば入逢の鐘に花そちりける

△「鐘」 「夕くれ」

◎「長閑」(春)

○古曾部 大阪府高槻市。能因法師が隠棲した地。○山寺の「山ざとにまかりて、よみ侍りける／山ざとのはるの夕暮きて見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける」(新古今・春歌下・一一六・能因)。「定家十体」『能因法師歌集』など「山寺の」の形で載るものもあるが、「古曾部の寺にて」の詞書をもつものは見当たらない。

四名

79 のためなる淀の川瀬の薄霞

古曾部方淀川すしのためなるを見おろしたる遠望。

◎「薄霞」(春)

○のため 篋撓・篋矯。のだめ。矢竹の曲がりため直すこと。また、その具。「のため」が細い木に斜めに溝を彫り刻んだものであることから、ここでは斜めになっていることをいう。

80 堤の馬の跡の鐘もち

西湖の堤の俤あり。

△「鐘持」

○西湖 中国浙江省杭州の湖。有名な三堤がある。

81 先へ行主と歩荷の咄して

堤に行ちかふ旅客の有様。

○歩荷 ぼっか。山で荷物を背負って運ぶ人夫。

82 昼挑灯に宿の観音

いはずして開帳なり。往來の宿並に、思ひかけす善の綱に昼挑灯、相應の参詣に銭はとれても、いまた紙袋を配る事はしらす。

△「開帳也」「て」にルビなし。

○善の綱 開帳などのときに、結縁のために仏像の手などにかけ、参詣者に引かせる五色の綱。○紙袋 宿が引札の代わりに配って宣伝する。

83 日に照らすうす落の棚さらし

菊のきれめのかみはらひ、糖桶の平鑿はいつの世よりはしまりたるぞ。

△「さらし」にルビなし。「こみはらひ」

○菊のきれめ 落雁の模様。○糖桶 砂糖桶。○平鑿 平鑿ひらのみ。刃先の平らな鑿。ここでは落雁の模様をつけるのに用いるものか。

84 子をかたつけて武士を取り置

姉は所のお代官へ出し、弟は何かし寺の喰物にやる。夫婦かけ向ひに成て、談合づくにて刀脇指はうつてやつたり。

○かけ向ひ 二人だけで向かい合うこと。○うつてやつたり 子どもたちはよそへやつても、刀脇指は売らずにそのままうちやつておき、武士の面目は保とうとする。

85 かた隅に女房を隠す古紙帳

さすがに武士のかとをつぶしかね、人のつばの入子はよはしと難じ、雪駄革たひは無用心とて一生損を仕たり。

◎「紙帳」(夏)「女房」(恋)

○紙帳 和紙をはり合わせて作った蚊帳。好事家がつる場合もあったが、安価なので麻の蚊帳を買えない人々が用いた。武士の体面を保つため、女房は表に出さず、せめて古い蚊帳の後ろに隠す。○かた隅。一門のこと。

86 味噌すりさして青菜呼込

さすか牢人、友達には紙帳の中入をし待れと、青菜もみ大根はみつから出て呼込ヱイコ。

△「大根」

○もみ大根 一度間引いたのちに、さらに間引いて採った大根のことで、早漬けにして食べる。

87 養生に上りて京のかし座舗

味噌すりさして菜うり呼込ほとらい、川原町の借座敷、野郎役者の一ツ炉地、又なき乗相と見るへし。

△「かし座敷」「味噌」「野良」

◎「かし座舗」(恋)か。

○川原町 京都市鴨川の西を南北に走る河原町通り周辺の地域で、芝

居小屋・茶屋が集まり繁栄した。○借座敷 遊山宿。○野郎役者 若衆の歌舞伎役者。○一ツ炉地 そこだけ孤立した路地。○乗相 こでは一句の取り合わせの妙をいったもの。

88 鼻ノビに着たる祇菌清水

腹力なき二たひ食、大仏までは遠道成へし。

○二たひ食 胃の弱った人のための、二度煮て柔らかくした飯。「朝食鑑」「穀部之二」に「釜中に初め水を入れること稍多く、既に熟して取り出し、淘籾(ざる)に投じて、湯汁を漉し去て、籾を蓋して自ら其の気に蒸す。此れを湯取と謂ふ。(中略)復た再び煮熟す、呼て二度食と称して久痾胃弱の人に用ゆ。」とある。○大仏 京都の方広寺(京都市東山区)にあった大仏。たびたび造り直されているが、この当時のものは「都名所図会」(安永九・一七八〇年刊)に「本尊は盧舎那仏の坐像、御丈六丈三尺」とあり、奈良の大仏よりもかなり大きかった。門前では大仏餅が売られていた。

89 八月に模様をかえて後の月

嵯峨、廣沢ときはめたるは、一段所も聞よし。泥町、柴屋丁とさ、やきたるは、一座もせざる先にひく仁とは見ぬか
れたり。

△「廣澤」「柴屋町」

◎「後の月」(秋)

○後の月 陰曆九月十三夜の月。枝豆や栗を供えた。○嵯峨、廣澤
観月の名所。○泥町 京都市伏見区山崎町の西部にあった遊廓。
○柴屋丁 滋賀県大津市長等にあった遊廓。○一座 ここでは名月
を楽しむ風雅の会。

90 蚕シメに喰はれて鹿聞カミに行

高雄、大原野の芋食にやつれ、淀鯉イナ、御前鯛オマヘの油気をさら
んと思へる人は、たま〜京にもあるへし。

※「蚕」は「蚤」の誤記だが、林篁筆写専宗寺旧藏影写本も「蚕」。

△「喰は」

◎「鹿聞」(秋)

○高雄 京都市右京区の愛宕山東麓の地。清滝川の溪谷美で知られ、
紅葉の名所。○大原野 京都市西京区大原野の小高い台地。紅葉の
名所。○淀鯉 淀川で産する鯉。非常に美味とされる。○御前鯛 兵
庫県西宮市の南の海浜を御前の浜と呼び、鯛で有名であった。「西宮
御前澳の桜鯛は蛭子三郎殿つり初」(「撰津名所図会」とある。○た
ま〜) ここではうまい淀鯉や御前鯛を食べずに、風流な高雄や大
原野で芋を食べようという物好きが、京都にもまれにはいるだろう
ということ。

91 群猿グンザンに日本一の黍団子

あのつしよりは宗甫の流をくめる友達に出合、横小路より

は外郎か孫弟子と名乗て、一ツくだされ、お供申さんと打
つれたる、鹿聞山寺のうそ約束、無亭主ふりに一夜をあか
す。やめめ鴉に目をさまし、むら猿に追立られて庚申毎の
咄とはなれり。

△「外良」「名乗りて」「御供」「鴉の」

◎「黍」(秋)

○黍団子 『和漢三才図会』(正徳二年序)の「稷」の項目に「按ずる
に、稷、古は飯と為し、毎に食ふ。今は、唯磨末して団子餅と為し、
賤民の用る所なり。」とある。○あのつし 未詳。○宗甫 小堀宗甫
(遠州)。遠州流茶道の流祖。○外郎 下郎。しもべ。○無亭主ふり
主人役が客に対して不愛想で、もてなしぶりがよくないこと。○や
めめ鴉 夜明け方に、男女の別れを促すように鳴く鳥を、連れ添う
手の相手のいない鳥とののしつていう語。○庚申 庚申待ち。庚申
の日の夜に集まり、一晚中眠らずに夜を明かす行事。

92 皆茶売ミナチャウリにて政所マサトの能

江州政所の山中に君か畑といふ所ありて、むかしいつれの
君かすませ給ふよし。其つき〜のなかれ残りて、能太夫
あれは役者もあり。田村高砂の能は今もなる也。代喚トビ事
変じて皆茶売なり。見物申入の弁当は、山中の物とて米の
団子はなし。

△「いつれ君」「変して」

○政所 滋賀県東近江市東部の一地区。政所茶の産地。○君か畑 滋賀県東近江市の地名。惟喬親王が幽棲したといわれる小松ヶ畑が君ヶ畑と呼ばれるようになった。『玉勝間』巻六に「あふみの犬上、郡の山中に、君が畑村といふ有て、大公大明神といふ社あり、惟高親王をまつるといへり」とある。○つきぐく そば仕えの者。

名ウ

93 老僧は非檐ヒエンの袈裟で打直り

政所の能の正客、道場の御坊、右座は氏神の神主成へし。

△「飛檐」ルビなし。「袈裟で」「なるへし」

○非檐 飛檐。飛檐垂木という、寺院の二重の垂木のうちの上段の垂木を指すこともあるが、ここでは仏殿の内陣に接する両側の部屋のこと。浄土真宗においては、本山の法会でここに座することを許された末寺の格式のことも飛檐と呼ぶ。○道場 広く仏道修行の場のことであるが、浄土真宗や時宗では特に念仏の集まりを行う場をいう。

94 蠟燭かへて二親の布施

本願寺の旦那、お寺を呼んで父親チチの年忌にあたる。何やら有

難き御経すめは、ろうそくをとほしかへ、盃にこき箸のお布施をすへて、母親の取越も一度に仕廻ふ。した、か食をしゐて、膳をあげれば、追付塗台に白米を入れて、茶菓子を出す。つかみませぬき穂は楊枝の御心付もあまり微細成

へし。

△「父親」「蠟燭」「お布施」「あければ」「なるへし」

○本願寺の旦那 羽振りがよい。○こき箸 扱箸。細竹の一端をくくって、その合わせ目に稲の穂をはさんで一穂ずつこきおとした脱穀の道具。千歯扱にとつてかわられたが、収穫脱穀完了の祝いを「扱こばし上げ」と呼んだり、「扱こばし納め」といって扱箸を床の間に供えたりする地域もあった。○取越 忌日を繰り上げて行う法事。○つかみませぬき穂 ぬき穂は神事祭祀における稲。次々に御馳走を出した後、さらにお布施をとらせる様子をこう表現したもの。○楊枝の御心付 心付の楊枝にまで気をまわしてくれろという意。

95 糟薬も出来たる年は金に成り

専物持の百姓。

○糟薬 くずのような薬。

96 そふで隣へ娘よめらす

上着の縷子はなくても丹後の単に白手覆ひ白手拭なくてはならず。

是は村の葬礼の時、必さすと云。

△「隣」「上着」「云」が「いふ」。

◎「娘よめらす」(恋)

○そふ 素布。白い布。○手覆い 手の甲を覆う布。

97 赤く、と椀一束に盛ならべ

一束は十人前、日野五器なり。皿をも一束、五器をも一束、百姓の通談、鯛は足半、豆腐なげてもくたけぬを手柄とす。智かねの小袖を着たるは是を一生の始とす。

△「盛ならへ」「五器也」「なけても」

○一束は十人前 様々なものについて、一〇把を一束と数える。○五器 御器。食物を盛る蓋つきの器。特に椀。日野五器は近江国日野（滋賀県蒲生郡日野町）から産した漆器。○鯛は足半 婚礼で食べる鯛は足半、豆腐は固いものがよいとされるといふことであるが、鯛の足半については未詳。足半はかかとの部分のない短い藁草履。はきやすく軽くて走るのに便利なため武士に好まれ、農村・山村・漁村においても作業用として用いられた。なお、鯛は「本朝食鑑」「鱗部」には、丹後の産を以て上品と為し、越中の産、之に次ぐ。其の余は二州の産に及ばず。」とみえる。

98 無尽の礼は坊の戸平次

在郷の頼母子振舞、うまい事を尽す戸平次といふ坊主ありて、妙楽といふ女有。

△「女有り」

○無尽 無尽講の略。講に属するメンバーが一定の期日に一定の掛金を出して、くじ引きや入札などにより、順次全員に一定の融通をした。頼母子とも。ここでは、戸平次のはからいで無尽に当たった

人が礼をする。

99 だまさる、人喰馬に花散て

戸平二、若い時は在郷馬工郎をしたり。人喰馬にだまされて、形見は小指に残れり。

△「戸平次」「若い時在郷馬工良」

◎「花」（春）

○馬工郎 牛や馬に詳しく、牛馬の売買やその仲介をする者。

100 御暇出たる紀伊国の殿

二月廿八日、尾張紀伊国御暇始とす。尾張は馬所、紀の国は江戸にて馬を買、中次の調練、麻たねをはませ、小便を飼、金川の泊より例の持病おこりて鬼神となる。

◎自注から紀伊国御暇始で春。

○御暇 公家や大名が江戸での勤務を解かれ、帰国すること。○馬所 馬の産地。江戸時代、池鯉鮒（愛知県知立市）は東海道の宿場として栄え、馬市が立った。○麻たね 麻の実。○金川 神奈川。